人文地理学研究　XXVIII　1~11　2004

1960年代以降におけるフランス農村地理学の動向

手　塚　　章

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　農業地理学から農村地理学へ
　Ⅱ－1　20世紀中葉のフランス農村地理学
　Ⅱ－2　都市化と農村空間
Ⅲ　1980年代以降の研究動向
　Ⅲ－1　農村空間の環境問題
　Ⅲ－2　政策と農業変化
　Ⅲ－3　文化地理学的視点
Ⅳ　むすび

キーワード：農村地理学，農業地理学，フランス

Ⅰ　はじめに

20世紀の前半を通じて，農村地理学は，フランス地理学のまさに中心をなす分野であった．ヴィダル・ド・ラブラーシュを指導者とするフランス地理学派は，国内の農村地域を中心的な研究対象として，すぐれた成果を次々に生み出してきたからである（手塚，1980）．これに比べると，近年の状況は，むしろ農村地理学が周辺的な分野であるかのように見える．地理学研究者の名簿で判断するかぎり，農村空間あるいは農村地理学を専門分野としているものは，フランスの場合，とくに若手の研究者で手薄なように思われる．これと呼応して，新しい研究テーマや着眼点にもとづく農村地理学の著作も，従来に比べると，かなり乏しくなりつつあるのが現状であろう．

農村地理学の変化は，同時に，研究課題や着眼点の大きな変更をともなっていた．1960年代にいたるまで，フランスの農村地理学は，そのまま農業地理学と読み替えることができた．1963年に刊行されたピエール・ジョルジュの著作「農村地理学概説」では，農業以外のテーマがほとんど触れられていない（George，1963）．これに対して，ジョルジュの教えを受けた地理学者たちは，農業的な側面で農村空間をとらえるよりも，むしろ「農村空間の都市化」という問題意識が濃厚である．かくして，1960年代頃を境にして，フランスの農村地理学にパラダイム・シフトが生じたという見方もできる．これは，研究分野の名称として，20世紀の前半，盛んに用いられたgéographie agraireという言葉が，近年では全くといってよいほど使われなくなった事実に反映している．

ただし，1960年代以降，農村地理学の「新しいパラダイム」が成立したわけではない．その後，農村地理学の研究動向は多様に分岐し，現在では農村地理学というフレームワークにおさまりきらない様相を示しているからである．農村空間や農村地理学をキーワードに検索すると，今日のフランス農村地理学は，きわめて低迷しているように見える．しかし，別の観点にたつと，農村地域にかかわる新しい論点や理念が，1980年代以降においても，次々に提起されてきたように思われる．以下では，こうした観点から，フランス農村地理学の過去半世紀にわたる歩みを，中心的な理念や研究課題

の変化に着目しつつ，簡潔に整理することにしたい．

Ⅱ　農業地理学から農村地理学へ

Ⅱ－1　20世紀中葉のフランス農村地理学

筆者はかつて，フランスにおける農村地理学の研究動向を整理したことがある（手塚，1980）．そこで述べたことは，20世紀の前半を通じて農村地理学の中心課題が農業景観（農地景観および農業集落景観）の分析であったこと，第2次世界大戦以降，とくに1960年代以降，新しい視点にもとづく農村地域研究が盛んになったことの2点であり，新しい研究動向を特徴づける性格として，（1）非農業的要素を含めた農村空間の総合的研究，（2）分析スケールの多様化，（3）農村地域整備への関心，の3点をあげた．

同様のテーマについて，フランスの農村地理研究者であるシャピュイは，研究関心の移行につれて研究分野をあらわす名称が変化してきた事実を指摘している（Chapuis，1984）．すなわち，農地景観や集落景観の分析が主要な研究関心であった時期には，もっぱらgéographie agraireという分野名称が用いられたが，その後，農業生産や農業立地に関する経済地理学的分析を中心とする分野に対してはgéographie agricoleという分野名称が，さらに，農村空間に対する社会地理学的分析を主とする分野に対してはgéographie rurale という分野名称が用いられるようになった．このような分野名称の変遷が，フランス（ひいては欧米）における農村地理学研究の重点移行を象徴的に示しているというのである．ちなみに，géographie ruraleという言葉そのものは，すでに1930年代から存在した．しかし，当時における用語法はそれほど明確でなく，しばしばgéographie agraireの同義語として使われたようである（Lévy et Lussault ed., 2003, p.809）．

ともあれ，手塚（1980）とChapuis（1984）の認識は基本的に一致しており，それをまとめれば次のように整理することができよう．すなわち，フランスの農村地域研究において，1950年代まで主流を占めたのは「農業景観の地理学」であった．その後，1960年代から1970年代にかけて「農業生産の地理学」と「農村社会の地理学」が急速な発展をとげた．このような状況は，多少のニュアンスの違いこそあれ，ドイツやイギリス，アメリカでも基本的には同じであったように思われる．さらにいえば，日本においても同様の傾向をみてとることができる．

その背景として最初に指摘できることは，第2次世界大戦以降，先進工業諸国の農村空間が，それまでに較べて加速度的なスピードで急激に変化した事実である．農業生産の側面では，農業経営の大規模化・専門化・集約化をともなう農業近代化の進展が，変化の主要な内容であった．他方，農村社会の側面では，郊外化や大都市圏化の進行にともなう混住化および多機能化が，最も目立った変化であったといえる．また，立地条件にめぐまれない山間地域や遠隔地域における人口減少や過疎化の進行も，もうひとつの目立った変化といえよう．これらに代表される農村実態の大きな変化が，1960年代以降における新しい視点からの農村研究をうながしたわけである．

Ⅱ－2　都市化と農村空間

こうした新しい研究動向のなかで，1960年代から1970年代を通じ，地理学研究者の主要な関心は，農村空間における社会的（あるいは文化的）な都市化現象に向けられたといえる．ヨーロッパの農村は，かつて城壁や要塞施設に囲まれていた都市空間に対して，明確に異なる空間として意識されてきた．しかし，アメリカで始まった広範な郊外化の現象が少し遅れてヨーロッパをとらえるようになると，都市と農村の空間的な不連続性があいまいになり，それまで都市的とみなされてきた要素が農村でも目立つようになった．このような現象は，当初，一般に「農村の都市化」というフレームワークで把握され，極端にいえば従来の「農村」が消滅して，「都市」に同化していく段階的なプロセスの一部と考えられた．その結果，農村研究においても，都市研究の場合と基本的に同じような社会地理学的アプローチが採用され，農村住民の社会属性や生活文化が考察の中心にすえられたわけである．

しかし，都市化が農村地理学研究のキーワードであり続けたことは事実にせよ，その解釈あるいは「農村空間における都市的要素の位置づけ」について，1960年代と1970年代では，強調点に多少の変化が生じたように思われる．以下では，いくぶん図式的になるきらいはあるが，こうした変化について簡潔に整理しておきたい．

1）農村空間と都市空間

都市・農村関係についての伝統的な見方は，両者を対立的にとらえるものであり，これは1960年代までのフランスで，最も有力な見方であった．農村は，何よりもまず「自然」の側にあった．もっとも，この場合の「自然」は，もっぱら農業生産や原料生産に限定されていた．多量の農村人口が都市へ流出する現象は，すでに19世紀の後半から顕著にみられたが，これも農村の基本性格を変化させるものとは考えられていなかった．これに対して，都市は，いわば「技術」の側にあった．したがって，都市と農村をとらえる理念的なモデルは，明確に異なる2つの実体の対立的な関係であったといえる．

1950年代までのフランス農村地理学は，このような枠組みを色濃く反映していた．たとえば，フランスの地理学界で，農村地理学と都市地理学の区別はきわめて明瞭であった（George，1963）．また，農村地理学者が研究すべき対象は，何よりもまず，農業景観や農業生産であった．極端な場合，それは「パリの近郊農村」を対象にした研究にもあてはまった（Phlipponneau，1956）．ただし，農村がひとつの明瞭な実体とみなされたとはいえ，その内部が均質でないことは自明であった．その結果，論理的な帰結として，農村空間の多様性は，自然環境の地域差や農業活動の地域差にもとづいて把握された．すなわち，農村を地域区分するとき，その基準はもっぱら農業景観や農産物の分布であった．農村地域区分は，「農業地域区分」あるいは「自然地域区分」とほとんど同義語であった．

都市と農村を対立的にとらえる概念モデルは，政治思想や社会運動の世界にも浸透しており，こうした社会風潮をレイノーは「ルーラリズム（農村主義）」という言葉で表現している（Reynaud，1974）．なかでも，道徳的価値にもとづいて農村を擁護する人々は，都市・農村関係における対立モデルの根強い信奉者であり，農村にみられる独自の価値を積極的に評価するとともに，都市化がもたらす「悪しき」影響力への懸念を表明した．もっとも，ある意味で，こうした対立的なとらえかたは，次に述

べる「農村空間の都市化」モデルに通じるところがあり，その前奏曲ともいえた．

2）農村空間の都市化

1960年代にはいり，フランス経済の高度成長（「栄光の三十年」と呼ばれる）がその果実（雇用や消費の伸び，生活水準の向上など）をもたらすようになると，新しい理念モデルが前景にあらわれた．これが「農村空間の都市化」モデルである．そこでは，空間的な意味でも社会的な意味でも，都市と農村の区別が基本的に否定された．すべての空間が，都市化という一つの系列に位置づけられたわけである．換言すれば，「農村空間の都市化」モデルは，都市化という系列上での非可逆的な変化過程を想定しており，その意味で非弁証法的なモデルといえた．そこで主張されたことは，従来の対立的な都市・農村関係の終焉であり，極端な場合には，「農村」という概念それ自体が否定された．

このような発想は，とりわけ当時の農村社会学に強く感じられる．都市化モデルでは，農村住民の都市（あるいは都市的生活様式）への同化が，何よりもまず強調された．都市文化の拡散，都市的消費の拡大，都市的習慣や都市的行動の普及が，何よりもまず強調されたのである．たしかに，都市と農村の違いを生活様式にもとめるかぎり，都市的生活様式の普及は都市と農村の差を消滅させる．社会学者のランボーによれば，「都市化とは，（中略）人間社会の単一性を実現するような（普遍的な）生活様式が生み出される過程」であった（Rambaud，1969）．

1960年代から1970年代にかけてのフランス地理学界では，こうした一般的風潮の影響が強く感じられる．都市あるいは都市ネットワークを基軸にすえた地誌研究が，この時期に隆盛をほこったことは，その明らかな反映であろう．また，農村地理学者の一部も，この種の認識モデルに近い立場を採用している（たとえば，Juillard，1961）．もっとも，当時から，こうした風潮に反対する地理学者も存在し，依然として存在する農村空間と都市空間の不連続性を強調すべきであると論じた（Bontron et Mathieu，1968）．しかし，こうした対抗的な流れは，当時卓越していた「農村空間の都市化」モデルに対し，フランスの地理学界では，あくまで少数派にすぎなかったように思われる．

3）農村空間の独自性

1970年代になると，支配的な風潮に対する疑問が強まり，ある意味では，潮流の逆転がみられるようになった．すなわち，1960年代に見失われていた「自然」が，ふたたび前景に登場するようになった．農村空間は，もはや単に農業空間として把握されるわけではなかったが，同時に，都市空間とは明確に異なる存在とみなされるようになったのである．その意味で，都市と農村は，ふたたび対立的な視点でとらえられるようになったということができる．

この時期における農村地理研究も，こうした一般動向に対応していた．この時期を特徴づける「新しい農村地理学」の主張は，その最も明瞭な反映とみることができる（Kayser，1972；Bonnamour，1973）．また，こうした流れに沿って，多様な視点からの農村地域区分が試みられたのも，この時期のことである（代表例としては，Calmes et al., 1978）．もちろん，「農村空間の都市化」モデルは，この時期にも依然として有力であった．しかし，全体としていえば，空間の非連続性と農村空間の独自性についての認識が，この時期に著しく強まったといえる．

Ⅲ　1980年代以降の研究動向

1980年代以降においても，前節で述べた研究動向の延長線上で，バラエティに富んだ研究成果が生み出されてきた．まず，農業生産の近代化に焦点をあてた研究としては，この種の農業経営がとくに発展をとげた地域を対象とする著作が，1980年代以降，相次いで公刊された．なかでも，アメリカ合衆国とフランスの穀物農業地域を詳細に分析したシャルベの著作（Charvet, 1985）や，アメリカ農業における垂直的統合の進展を記述したドレルの著作（Dorel, 1985）は，いずれも浩瀚な国家博士論文を一書にまとめたものであり，機械化や近代化の進行にともなう農業経営および農業地域の変容に関する地理学的考察の基本文献として参照されることが多い．

第２次世界大戦以降における農業生産の急激な変化は，第２（あるいは第３）の農業革命と形容されたり，「農業のハイテク化」あるいは「農業の工業化」など，さまざまに特徴づけがなされてきた（Pacione ed., 1986；Bowler ed., 1992）．フランスでは，この種の農業が発展した代表的な地域として，パリ盆地の穀物農業地域とブルターニュ半島内陸部における酪農地域および沿岸部における養豚・養鶏地域や野菜園芸地域がしばしば言及される．なかでも，ブルターニュ地方の畜産業は，輸入飼料に大きく依存した集約的な大量生産農業であり，生産性至上主義を象徴する「ブルターニュ型農業モデル」といわれてきた（Canèvet, 1992）．ちなみに，このカネベの著作では，1950年以降の40年間でまさに革命的な変容をとげたブルターニュ地方の農業生産が，1960～70年代の黄金時代から近年の危機的状況にいたるまで，詳細にあとづけられている．

しかし，「農業生産の地理学」と「農村社会の地理学」という２つの方向性のうち，1980年代以降も大きな注目を集め続けたのは，やはり「農村社会の地理学」であった．20世紀の中葉まで，農村空間はもっぱら農業空間として把握された．農村は，なによりもまず自然の側にあった．これに対して，第２次世界大戦以降，都市がかつてないスピードで成長するようになると，農村空間における農業的要素の比重は急速に後退した．大部分の先進諸国において，農村住民のなかの農業者は相対的な少数派（それも，しばしば非常にわずかな存在）に転落した．このような変化を背景として，農村研究者の目が農村空間における非農業的要素に注がれたのは，ごく自然な成り行きであった．

しかし，農業だけではなく，農村を非農業的要素まで含めて全体的に考察しようとする研究の流れにおいても，すでに前節で述べたように，研究の基本的な視点や立場が1970年代をさかいに一定の転換をとげたように思われる．

1960年代から1970年代を通じて，研究者の主要な関心は，農村空間における社会的あるいは文化的な都市化現象に向けられたといえる．このような流れは，当初，一般に「農村の都市化」というフレームワークで把握された．極端にいえば，従来の「農村」が消滅し，「都市」に同化していく非可逆的なプロセスと考えられたのである．したがって，農村研究においても，都市研究の場合と同じような社会地理学的アプローチが採用され，農村住民の社会属性や生活文化が考察の中心にすえられた．この種の研究視点は，1980年代以降にも引き継がれ，農村住民に関して多様な側面から分析をほどこした労作が生み出された（Chapuis et Brossard, 1986）．そこでは，農村の空間的特性がまったく無

視されたわけではないが，全体的にみると，景観や環境などにみられる農村的特性が後景にしりぞき，就業形態や生活様式などにみられる都市との共通性に焦点があてられた．

これに対して，1970年代の頃から，都市と異なる農村空間の特性がふたたび強く意識されるようになった．すなわち，農村空間はもはや単なる農業空間ではないけれども，かといって都市空間とは基本的に異なる性格をもつものと主張された．農村を単に都市化という視点だけから把握するのではなく，農村空間が内在的にかかえている問題点や可能性を総合的に考察しようというわけである．このような「新しい農村地理学」は，ボナムールやケゼールにより1970年代前半からすでに主張されていたが，それがフランス農村地理学の大きな流れとして定着したのは1970年代後半以降のことである（Bonnamour, 1993；Keyser, 1990）．

「農業生産の地理学」と「農村社会の地理学」を包摂し，さらに従来欠落していた自然的側面をも加味した「新しい農村地理学」の流れのなかで，それまで以上に多様な視点から農村地域類型の設定がなされ，低密度によって特徴づけられる農村空間の動態が詳細な分析の対象になった（Beguin et al., 1984；Béteille, 1981；Mathieu et Duboscq ed., 1985）．また，フランス国勢地図帳の第8巻として1998年に刊行された「農村空間」は，総合的な「農村空間の地理学」を目指すこの種の立場からの近年における集大成とみなすことができる（Auriac et Rey ed., 1998）．

以上では，近年におけるフランス農村地理学の基本的な動向をかけ足で描いてきたが，1980年代以降とくに目だつ傾向として，以下では「環境」「政策」「文化」の3側面に着目し，それぞれの背景と特徴について少し詳しく触れることにしたい．もちろん，これら3つの側面が，相互に独立しているわけではない．環境への関心が，政策や文化と密接に関連していることは言うまでもない．しかし，公表される論文や著作の具体的な研究テーマは，特定の側面に限定されている場合が多い．そこで，それぞれの側面に関する動向をまず述べたのちに，3側面に共通する性格を検討することにする．

Ⅲ－1　農村空間の環境問題

フランスの農村地理学で自然環境に大きな関心が寄せられるようになったのは，比較的最近のことである．先にも述べたように，自然に対する従来の関心は，もっぱら農業生産に影響をあたえる要因としての自然に限られていた．これに対して，1980年代以降における自然への関心の高まりは，深刻化する農村の環境問題やエコロジー的危機によって引き起こされたものである．農薬などによる水質の汚濁や，酸性雨による森林の破壊，土壌侵食の進行や景観の質の低下は，いずれも農村空間における自然的要素にふたたび目をむけさせる契機となった．したがって，この場合における自然は，農業活動基盤としての自然にとどまらず，より包括的な内容をともなっている．

このような動向は，ある意味で，20世紀初頭につぎつぎと現れたフランス地理学派の地誌研究（総合的な農村地域研究）の伝統を今日に再生した印象すらある．自然環境と人文環境の相互関係という発想が，いずれの場合にも根底にあるからであろう．しかし，かつての地誌研究では，人間活動におよぼす自然環境の影響を考察することに重点がおかれていたのに対して，近年の研究関心は，むしろ環境問題の空間的メカニズムを解明し，生態学的に健全な地域管理をめざすことに重きがおかれ

ている．

他方，農業に直接むすびつく背景としては，第２次世界大戦以降おし進められてきた大量生産型農業が，近年にいたって行き詰まりを迎え，転換を余儀なくされている状況がある．ブルターニュ型農業モデルで「栄光の20年」（1960年代～1970年代）を謳歌したブルターニュ地方では，1990年代に入ってから多様な問題が顕在化し，量から質へという方向転換の必要性に直面している．さらに，近年声高に叫ばれている「持続可能な農業」（sustainable agriculture；フランス語ではagriculture durable）にしても，工業製品やエネルギーを大量に投入する農業から「環境にやさしい農業」へという質的転換の必要性を背景としている（Ilbery, Chiotti and Rickard ed., 1997；Ilbery, 1998）．

上で述べたような状況を背景として，1990年代のフランス農村地理学では，しばしば「農村の危機」「農業の危機」が論じられ，「自然への回帰」「質を追求する農業」「土地柄（terroir）を反映する農業」が主張されるようになった（Béteille, 1994；Dérioz et al., 1996；Lefort, 1997；Lesourd, 1997）．また，農村地理学分野においても，研究の主要なキーワードとして「自然」や「環境」が目だつようになった．フランスとイギリスの農村地理研究者たちは，1980年代の末から定期的に合同シンポジウムを開催しているが，その報告書につけられたタイトルは示唆的である．1989年に開催された第１回目の報告書は「フランスとイギリスの農村」と題され多様な研究論文が収録されているが，第２回目のそれは「農村地域の変容」，第３回目のそれは「農村における環境と自然」であり，両国における農村地理研究者たちの関心の所在を示している（Croix ed., 1998）．

Ⅲ－２　政策と農業変化

政策に対する関心の高まりは，前項で触れた環境問題の深刻化や大量生産型農業の行き詰まりと裏腹の関係にある．フランスでは，1980年代の後半以降，地域計画の策定が大きな政策課題として再び浮上するようになった．しかし，かつて多くの地域計画が練られた1960年代に比較すると，課題とされる重点項目に一定の変化が認められる．もちろん，産業基盤や交通基盤の整備など，地域経済の発展をめざしたインフラストラクチャーの充実が，いずれの時期においても主要なテーマであることに変わりはない．しかし，それと並んで，近年の地域計画においては環境や景観が主要なテーマであり，それゆえ農村空間の保全と管理が行政によって強く意識されるようになった．

他方，フランスの農業生産は，EUの共通農業政策のもとで飛躍的な成長をとげてきたが，1980年代以降になると，過剰生産や過大な財政負担を背景に，従来の農業政策の大幅な改定が相ついで実施されるにいたった（手塚，2001）．政策が農業変化を強く規定してきたのは，共通農業政策が適用されはじめた1960年代から変わらない事実であるが，それが農村地理研究者たちの関心を引きつけたのは，とくにその変革期においてである．その意味では，近年のヨーロッパは激動の連続であり，共通農業政策の転換と農村地域の対応に強い関心が集まるようになったのは，きわめて当然の成り行きであった．

なかでも，1984年に導入された乳量割当制度や1992年に採択された「新しい」共通農業政策は，ヨーロッパの酪農地域や穀物農業地域に大きな影響をあたえ，政策と農業変化の関係をめぐって数多

くの考察を生み出した（Charvet, 1994；Hoggart, Buller and Black, 1995；Limouzin, 1996）．そこでは，地理学的な観点から，政策変更がもたらした地域的な帰結が吟味され，その地域選択的な作用や，意図せざる派生的な結果に対して検討が加えられた．共通農業政策の改革は，「アジェンダ2000」（1997年）の策定やベルリン協定（1999年）の成立など，その後も相ついでおり，さらに将来的には，東欧諸国へのＥＵ拡大をひかえて，重要な検討課題であり続けることは確実である．したがって，今後しばらくの間は，農業（ひいては農村）政策の取るべき方向性や，現在適用されつつある新しい農業政策の地域的影響をめぐって，引き続き活発な研究が展開されるであろう（Diry, 2000）．

Ⅲ－３　文化地理学的視点

1980年代以降におけるもう一つの特徴として，景観に対する関心がふたたび強まったことがあげられる．このような流れに属する初期の著作が，ピットによる「フランス風景史」であり，そこでは都市景観とならんで，農村景観の変遷に多くのページ数がさかれている（Pitte, 1984）．また，これと同じ年に，フランス地理学会の農村地理委員会が「フランス農村アトラス」を刊行しているが，その内容は空中写真や景観写真を多用し，農村空間の多様な姿を景観分析を通じて考察しようとしたものであった．さらに，同様な着眼点にもとづく農村景観アトラスは，ブリューネによっても1992年に刊行されている（Brunet, 1992）．

農村景観に対する関心の高まりは，異なった２つの側面から説明できる．その一つは，20世紀の前半を特徴づけた「農業景観の地理学」の伝統である．1960年代から1970年代にかけて，景観そのものに対する文化地理学的な関心は，農村空間の経済地理学的あるいは社会地理学的な関心のかげに隠れて目立たなかったことは事実であるが，けっして途切れたわけではなく，それまでの研究成果を集大成するような著作が次々に刊行されていたからである（Lebeau, 1969；Fénelon, 1970）．

しかし，1980年代以降に顕在化した景観への興味は，形態発生論的な関心を主とする従来の景観地理学とは異なる側面をともなっていた．それは，良質な農村景観をある種の文化財として評価し，積極的に保護しようとする姿勢である．農村空間で急速に進みつつある景観破壊への危機感を背景として，その評価と保全が農村地理学の重要な研究課題に浮上したといえる．

これと同時に，イギリスやアメリカなど，アングロサクソン系の諸国において，1980年代の後半からポストモダニズムを標榜する地理学研究者が増加したという背景もある．イメージや理想，文化などを手がかりに，理念的な考察を展開する風潮が農村地理学にもおよんだわけである（Cloke, 1997；Bunce, 1994）．フランスでも，1990年代以降における文化地理学の発展は目覚ましく，1992年には「地理学と文化」と題された学術雑誌が創刊されている．しかし，全体としてみると，フランス地理学界へのポストモダニズムの浸透は，イギリスやアメリカほど強くないようである．哲学的な議論よりもフィールドワークを重視するフランス農村地理学の伝統は，景観や文化を考察する場合も，今日まで受け継がれているように思われる．

Ⅳ　む　す　び

以上において，1960年代以降，フランス農村地理学を特徴づけてきた基本動向をみてきたが，最後に，1980年代以降の新しい諸傾向に関して，共通してみられる性格をいくつか指摘しておきたい．

まず，第一にいえることは，上で述べた3つのキーワード（環境，政策，文化）のいずれもが，現代的な社会問題として意識されていることである．その背景には，自然にせよ農業にせよ景観にせよ，それらの質が，近年，急速に悪化しつつあるという危機感が存在する．第2次世界大戦後のフランス農村地理学は，過疎化・都市化・農業近代化など，その時々の社会問題に対して，積極的な取り組みをみせてきた．こうした社会的要請に対する敏感さが，近年における研究動向にも反映しており，同時に農村地理学の社会的意義や科学的価値を保証している．

第二に，これら3つのキーワードが，農村地理学にとどまらず，他の人文地理学分野（都市地理学，人口地理学，交通地理学など）でも重要になりつつある事実を指摘できる．さらには，自然地理学研究においてさえ，環境や政策や文化に対する関心が高まっている．自然と人文を包摂した地理学，形容詞のつかない地理学が，これらの現代的課題に対して正面から取り組むことを期待されているともいえる．このような認識にもとづくとき，農村地理学は今後にむけて絶好のポジションにいるように思われる．なぜなら，人文と自然の両者を視野におさめ，総合的に地域を考察しようとする態度は，伝統的に農村地理学の基本的な姿勢であったからである．

本稿のとりまとめにあたって，平成13・14・15年度の科学研究費・基盤研究（B）（1）「日本における農村地理学構築のための理論的・実証的研究」（代表者：田林　明，課題番号13480014）の一部を使用した．

参考文献

手塚　章（1980）：フランスにおける農村地理学の動向．地学雑誌，**89**，297-313.

手塚　章（2001）：新共通農業政策下におけるフランス農業変化の地域的側面．筑波大学人文地理学研究，**25**，249-271.

Auriac, F. et Rey, V. ed. (1998): *L'espace rural*. RECLUS/La Documentation Française, Montpellier/Paris, 128p.

Beguin, M. et al. (1984): 140 *cartes sur la France rurale*. Université de Paris I, Paris.

Béteille, R. (1981): *La France du vide*. LITEC, 252p.

Béteille, R. (1994): *La crise rurale*. PUF, Paris, 127p.

Bonnamour, J. (1973): *Géographie rurale: méthodes et perspectives*. Masson, Paris, 168p.

Bonnamour, J. (1993): *Géographie rurale: position et méthode*. Masson, Paris, 134p.

Bontron, J.C. et Mathieu, N. (1968): *L'espace rural français: définition et évolution à long terme*. SEGESA, Paris.

Bowler, I.R. ed. (1992): *The geography of agriculture in developed market economies*. Longman, Harlow, 317p.

Brunet, P. ed. (1992): *L'atlas des paysages ruraux de France*. Jean-Pierre de Monza, Paris, 200p.

Bunce, M. (1994): *The countryside ideal: Anglo-American images of landscape*. Routledge, London/New York, 232p.

Canèvet, C. (1992): *Le modèle agricole breton: histoire et géographie d'une révolution agro-alimentaire*. Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 397p.

Calmes, R. et al. (1978): *L'espace rural français*. Masson, Paris, 171p.

Chapuis, R. (1984): La géographie agraire et la géographie rurale. in: Bailly, A. et al.：*Les concepts de la géographie humaine*. Masson, Paris, 101-110.

Chapuis, R. et Brossard, T. (1986): *Les ruraux français*. Masson, Paris, 224p.

Charvet, J.-P. (1985): *Les Greniers du monde*.

Economica, Paris, 368p.

Charvet, J.-P. (1994): *La France agricole en état de choc*. Editions LIRIS, Paris, 223p.

Cloke, P. (1997): Country backwater to virtual village ?: rural studies and the cultural turn. *Journal of Rural Studies*, **13**, 367-375.

Croix, N. ed. (1998): *Environnement et nature dans les campagnes*. Presses Universitaires de Rennes, Rennes, 259p.

Dérioz, P. et al. (1996): Des paysages ruraux fragiles et des paysages en mutation. in: *Les Français dans leur environnement*. Nathan, Paris, 145-181.

Diry, J.-P. (2000): *Campagnes d'Europe: des espaces en mutation*. La Documentation Française, Paris, 64p.

Dorel, G. (1985): *Agriculture et grandes entreprises aux Etats-Unis*. Economica, Paris, 585p.

Fénelon, P. (1970): *Vocabulaire de géographie agraire*. Faculté des Lettres de Tours, Tours.

George, P. (1963): *Précis de géographie rurale*. PUF, Paris, 360p.

Hoggart, K., Buller, H. and Black, R. (1995): *Rural Europe: identity and change*. Arnold, London, 319.

Ilbery, B. ed. (1998): *The geography of rural change*. Longman, Harlow, 267p.

Ilbery, J., Chiotti, B. and Rickard, Q. ed. (1997): *Agricultural restructuring and sustainability: a geographical perspective*. Oxford University Press, Oxford.

Juillard, E. (1961): L'urbanisation des campagnes en Europe occidentale. *Etudes Rurales*, 1961-1, 18-33.

Keyser, B. (1972): L'espace non métropolisé du territoire français. *Revue Géographique des Pyrénées et du Sud-Ouest*, **40**, 371-378.

Keyser, B. (1990): *La renaissance rurale: sociologie des campagnes du monde occidental*. Armand Colin, Paris, 316 p.

Lebeau, R. (1969): *Les grands types de structures agraires dans le monde*. Masson, Paris, 120p.

Lefort, I. (1997): *Crises et mutations des espaces ruraux dans les pays anciennement industrialisés*. Economica, Paris, 112p.

Lesourd, M. (1997): *Crises et mutations des agricultures et des espaces ruraux*. Editions du Temps, Paris, 159p.

Lévy, J. et Lussault, M. ed. (2003): *Dictionnaire de la géographie*. Belin, Paris.

Limouzin, P. (1996): *Les agricultures de l'Union européenne*. Armand Colin, Paris, 160p.

Mathieu, N. et Duboscq, P. ed. (1985): *Voyage en France par les pays de faible densité*. Editions du CNRS, Paris, 179 p.

Pacione, M. ed. (1986): *Progress in agricultural geography*. Croom Helm, Beckenham, 267p.

Phillips, D. and Williams, A. (1984): *Rural Britain: a social geography*. Basil Blackwell, Oxford, 274p.

Phlipponneau, M. (1956): *La vie rurale dans la banlieue parisienne*. Armand Colin, Paris, 593p.

Pitte, J.-R. (1984): *Histoire du paysage français*. Tallandier, Paris, 238p. + 203p.（手塚　章・高橋伸夫訳『フランス文化と風景（上・下）』東洋書林，1998年）

Rambaud, P. (1969): *Société rurale et urbanization*. Le Seuil, Paris, 318 p.

Reynaud, A. (1974): *La géographie entre le mythe et la science*. Institut de Géographie de Reims, Reims, 204p.

Research Trends of French Rural Geography from the 1960's

Akira TEZUKA

In the second half of the twentieth century, French rural geography has experienced the important metamorphoses of its research topics and its methodologies. While its central research theme was the agricultural structure of rural space in the first half of the twentieth century, research agenda from the 1960's has increasingly diversified. The author examined in this paper the major tendencies of recent research efforts concerning French rural areas. Especially, the theme of urbanization in the 1960's and the 1970's, and also the themes of environment, policy and culture in the 1990's are emphasized.

Key words: Rural geography, Agricultural geography, France